

2016年9月、創立130周年を迎える宮城学院。

そんな節目の瞬間を、学院全体で盛り上げていくため、新たに「宮城学院 130th VIEW」を創刊しました。タイトルの“VIEW”には「130周年記念事業やこれまでの歴史など、宮城学院に関するさまざまなものを皆さまに広い範囲で見てほしい」との意味が込められています。紙面では、130周年に関する情報をはじめ学院の歩み、教職員の学院に対する思いなどを紹介。2週間に1度、皆さまにお届けします。記念すべき創刊号を飾るのは、嶋田順好 学院長です。

信仰による冒険者

学院長 嶋田 順好



初代校長エリザベス・R・プールボー宣教師、メアリー・オールト宣教師の仙台までの旅路を振り返ってみると、1886年6月3日午前7時45分にペンシルバニア州ハリスバーグを出発。広大なアメリカ大陸を鉄道で走りぬけ、10日の午前11時10分にサンフランシスコに到着しています。旅の疲れを癒す暇もなく12日の午前2時にはシティ・オブ・シドニー号に乗船、船酔いに苦しめられ続けた「長い陰鬱な」20日間の航海に耐え、7月2日(金)に横浜港に到着、文字通りまるまる1カ月間の長旅を経て、日本にたどり着いたのです。

早速二人は、横浜や築地の居留地に建てられたミッション・スクールを精力的に視察します。この調査を通し、すでに東京、横浜には先行した宣教団体によって、多くの女学校が開校されており、自分たちが意義ある働きをする可能性が少ないことを見抜くのです。その頃一足先に仙台で押川方義牧師と共に仙台神学校を立ち上げたウィリアム・E・ホーイ宣教師から、仙台では女学校の創設が非常に強く期待されているとの手紙を受け取り、二人は迷わず東北の地で最初のキリスト教に基づく女学校を創設するという厳しくも光栄に満ちたヴィジョンに応えることを決意します。

当時は鉄道が通っていなかったため、旅路には再び船が用いられました。荻の浜港、塩釜港を経て、7月16日午後11時30分に「手に手に提灯を持って仙台市の郊外利府まで出迎えていた多数の教会員に暖かく歓迎されながら仙台に着いた」と報告されています。つまり、きわめて重要なこれら一切の決断が、日本に足を踏み入れてから、わずか2週間のうちに果されたことでした。そしてほぼ二か月後の9月18日には宮城女学校の開校式が持たれ、同24日には授業がはじめられたのです。もちろん、多くの心あるキリスト者の支援があったとはいえ、言語も、文化も、風土も異なる未知の地でこれらのことが為されたことを思うと、驚くべき電光石火の早業と言わずにはられません。

的確に状況を見極める洞察力、速やかに事をなす決断力、どんな時にもぶれない志を貫きつつ、ただ日本の少女のためにという神の召しに忘れ、これら一切のことを果たしたプールボー、オールト両宣教師の祈りと働きがあればこそ今日の宮城学院があるのです。この二人の宣教師の歩みを、「神を畏れ、隣人を愛する」ための信仰の冒険と呼ばずして何をもって冒険というのでしょうか。創立130周年を迎える私たちも、時代の荒波のなかであって、この二人の初志をしっかりと継承する冒険者でありたいと願います。